



Title	2015年ネパール大地震ノート
Author(s)	古川, 不可知
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 395-410
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2015年ネパール大地震ノート

古川 不可知

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

目次

- はじめに
- 1. 調査地概要
- 2. 2015年ネパール大地震ノート
 - 2.1 本震
 - 2.2 二度目の揺れ
- おわりに

キーワード

- ネパール
- ヒマラヤ
- 地震
- トレッキング

はじめに

2015年4月25日、ネパールではカトマンズ北西77kmを震源とするマグニチュード7.8の地震が発生し、同年5月12日にもマグニチュード7.3の最大余震が襲った。一連の地震により、ネパールでは2015年12月時点で8,891名の死者と22,302名の負傷者を出し、全壊した家屋は602,567戸、半壊家屋は284,479戸にのぼった¹。

地震発生当時、筆者はフィールドワークのためネパール東部に位置するソルクンブ郡の山地を移動中であった。筆者はその後、二か月間にわたって現地に留まり、揺れのなかを人々と共に過ごすことになる。本稿は当時のフィールドノートをもとに、時系列にそって地震時の状況を再構成し、筆者の目から見たネパールの一地域における震災経験を報告するものである。

1. 調査地概要

調査地はネパール東部のエベレスト南麓に位置するソルクンブ郡、特に北部のクンブ地方である。シェルパ族(jat)の居住地であるクンブは、全域がサガルマー



図1 ネパール地震地図 ※ネパール国立地震学センター (<http://www.seismonepal.gov.np> 2015/11/15閲覧)等をもとに筆者作成。

タ（エベレスト）国立公園として指定され、現在では年間3万人を超えるトレッキング／登山客が訪れる山岳観光のメッカとなっている。

起伏の激しい山岳地帯である当地では、谷筋に沿っていくつかの細い山道が走り、段丘の少し開けた場所に段々畠状の村が点在する。また現在では、沿道に観光客向けのロッジや茶店が並ぶようになり、ところどころに新たな小集落が形成されている。訪れる観光客のほとんどは、標高2,840mに位置するルクラ村の飛行場から、エベレスト・ベース・キャンプ（5,364m）を代表とする目的地まで往復2週間程度のコースを、ガイドやポーターを伴って歩く。主要なルートの分岐点となるナムチエ（3,440m）は地域最大の村であり、ル克拉からは歩いて二日の場所に位置する。南向きの斜面を開けた馬蹄形の村内には、現在では100軒以上のロッジや商店が立ち並び、トレッキング／登山観光の拠点となっている。

筆者はナムチエからさらに一日登ったポルツェ（3,800m）という村落を中心に、これまで通算1年9か月にわたってフィールドワークをおこなってきた。ポルツェは主要なトレッキング・ルートからは少し外れているため、村自体はさほど観光

地化せず、ほとんどの世帯がガイドやポーターとして登山やトレッキングの仕事に携わるようになった。およそ90戸400人が暮らすこの村には、現在では50名を超えるエベレスト登頂経験者が居住している。

この地域の家屋は基本的に木材で柱を立てて梁を渡したのち、石を積みあげて壁を作り、トタン屋根を載せるという形式で建てられる。典型的な民家は平屋か二階建てで下層を家畜小屋としたものであり、観光客向けのロッジも多くはこうした民家を改装したものである。ただし近年になって建てられたロッジはより大規模で、3階以上の階層を持つものもある。

ソルクンブ郡では一連の地震による死者数は22名、そのうちエベレスト登山中のもの18名（外国人7名）²と人的被害は比較的少なかった。しかし石造りの建物はほとんどが何らかのダメージを受け、土砂崩れによって山道や電気などのインフラは切断された。また地域にとってほぼ唯一の現金収入源である観光産業は大ダメージを受けることとなった。

なお筆者が地震後に現地に留まる選択をしたのは、飛行場の村が混乱状態であることや、原則的に自給自足可能なソルクンブ郡は首都と比較して安定していたこと、また開発援助専門家からのアドバイスや村の人たちの意見などを勘案した結果である。調査中は継続的に大使館や大学と連絡を取っており、決して独断や興味本位で滞在していたわけではないことを予めお断りしておく。

2. 2015年ネパール大地震ノート

本章では、2015年4月25日に発生したマグニチュード7.8の地震と、2015年5月12日のマグニチュード7.3の最大余震に焦点を合わせ、筆者の目から見た当時のソルクンブ郡の状況を、フィールドノートに基づいて再構成する。

2.1 本震

2015年4月25日 曇りのち雨

この日、筆者は調査地であるソルクンブ郡ポルツェ村に向かうため、早朝6時の飛行機でカトマンズからルクラへと移動した。アシスタント兼ポーターとして雇う約束をしていた友人のシェルパ青年とルクラ飛行場で合流し、7時半ごろより山道を移動し始める。途中、パクディン村で食事をとったあと、カトマンズからナムチエへ戻るところだという警察官の知人とも合流し、三人連れ立ってのんび

り山道を歩いていた。

11時56分ごろ、パクディン村の茶店が並ぶ一角を歩いていたところ、筆者を見つけた顔見知りが握手を求めて店から出てくる。そのとき、大きな揺れを感じて足元がふらつく。「地震が来た（ブインチャーロ・アーヨ）！」と叫びながら人々が次々に家から飛び出し、目の前の民家では二階から壁石がガラガラと音を立てながら崩れて落ちる。ゆっくりとした横揺れで、30秒ほど続いたように感じた。揺れが収まったタイミングで誰かが川向こうを指さすと、緑色の斜面に白灰色の線を引いて崩れてゆく土砂が見え、一拍遅れて雷鳴のような音が轟く。人々は「(地震が)また来るぞ」「家には近づくな」と大声で話し合う。

友人は1時間ほど先にある自宅を案じ、警察官はナムチェに急がなくてはと言うので、我々は先へ進むことに決める。村内の道は崩れた石であちこちが狭まっている。

村のはずれまで来ると、道端に集まっていた住民たちが「道はない」「土砂崩れで行き止まりだ」などとネパール語やシェルパ語で呼びかけて引き留める。先を見ると申し訳程度の崩落防止フェンスが崩れて一メートル立方ほどの岩と土砂が道をふさぎ、青臭い土の匂いが立ち込めてい

る。集まってきた見物人に、「ゆっくり行け」「急げ急げ」と好き勝手な声をかけられながら通過する。

山道には亀裂が走り、谷側はところどころえぐり取られたかのような半円形に崩落している。数か所では斜面が大きく崩れて道が流され、山側に登って迂回せねばならなかった。ただし時間が経つにつれて崩れた土砂は通行者によって踏み分けられ、板切れや平石で即席の足掛けが作られていった。小雨が降り出し、ナムチェ方面からは観光客グループが数組、小走りに駆け下りてくる。

この時点では、携帯電話は非常通話専用とアナウンスが流れるだけではほとんどつながらなかった。途中の集落では、住民がみな家から出てきて道端で不安そうに立ち話をしている。通り過ぎる我々と隣村の状況やどこで何人亡くなったなどと情報を交換しあうものの、人によって話す内容が異なる。カトマンズは大した被害ではないと言う人もあり、また壊滅状態だと主張する人もおり、情報が錯綜していた。

14時すぎ、チュモアの集落にある友人の家へ到着。奥さんと子供は無事だが、室内には人間の頭大の岩がベニヤの天井板を突き破って20個ほど落下している。「今日はたまたま子供をいつもと



写真1 地震直後の様子1 (2015年4月25日撮影)。



写真2 地震直後の様子2 (2015年4月25日撮影)。



写真3 山道には大小の土砂崩れが生じる (2015年4月27日撮影)。



写真4 建物の外で様子を見る人々 (2015年4月25日撮影)。

違う場所に寝かせていたから助かった」と奥さん。友人の希望でこの日はこれ以上移動せず、彼の家に宿泊することとする。破損して垂れ下がった天井板を剥がして重ね、石は外に投げ出す。警察官の友人はまっすぐナムチェへ向かうと言って去っていった。

15時6分、室内で茶を飲んでいると再び大きな余震が起きて家が軋み、全員で外に駆け出す。隣の大きなロッジには数組の西洋人グループが避難している様子。慌てて飛び出してきたとき、裸足で泣いている女性を別な男性が慰めている。ネパール人ガイドたちはオフィスとコンタクトが取れないと言い、ひとまずルクラに戻ってからカトマンズへ引き返すつもりだと話す。その後も余震が起こるたびに建物からぞろぞろと人が出てくる。ガイドの一人がネパール語で「今夜は寝られないぞ」とつぶやき、みんなで笑う。

この集落では電気が止まってしまったため、夕方からはロウソクを立てて過ごす。何度もかけていた携帯電話はこのとき初めて日本の友人に繋がり、大学などへの連絡を依頼する。日本でも大きく報道されていることを聞き、思いのほか大きな地震であったことを知る。隣のロッジではガイドが庭にテントを立て始めている。客を外で寝かすことに決めたようだ。ロッジのオーナーが友人宅の家主であるため、我々も駆り出されてテント張りを手伝う。

19時すぎ、来客が二人やってくる。ナムチェからソル（低地地方）の家に戻るところだという。ひとしきり地震に関する話をして大部屋にみなで横になるも、1時間おきくらいに揺れを感じ、そのたびに目を覚ましては天井から石が落ちてこないか警戒する。23時30分ごろ、大きな余震。「来た！」と叫んで全員で外へ。

2015年4月26日 曇り

みな寝付けなかった様子で、6時過ぎには起床して茶を飲む。早朝から通りには引き返してゆくトレッキング・グループが目につく。ガイドたちは、「道がない」「泊まるところがない」などと説明してくれる。ただこの時点では、トレッキングを続ける人たちも多くいた。この日、道中でばったり会ったガイドの知人は予定通りエベレスト・ベースキャンプまで行くと言い、「道はあるよ」と強調する。筆者は友人と相談のうえ、おそらく飛行機には乗れないだろうとの判断からこのままナムチェへ向かうことにする。

ナムチェ手前の新しい橋は、対岸の土砂崩れのため通行止め。遠回りして古い橋を使うようにと張り紙されており、すでに数人の人足がスコップで道を修繕し

ている。ナムチェから降りてきた人たちによると、正午にまた大きな地震が来るとのうわさが流れており、住民はみなロッジや店を閉めて逃げ出してしまったという。

13時ごろナムチェに到着。村の入り口にある茶店で休憩していると、比較的大きな揺れ³がきて建物が軋み、悲鳴があがる。外に出ると今いた店の壁に亀裂が入ってゆき、谷向こうではまた大きな土砂崩れが起きて土煙が上がっている。

ナムチェの中心部ではどのロッジにも鍵がかかっており、特にガイドを伴わない外国人トレッカーたちは部屋を探して右往左往している。小学校や空き地にはテントが並び、住民は建物の密集地を避けてそこに避難している。筆者らは知り合いのロッジをいくつかあたったのち、現地の人のために開けていた小さなロッジに部屋を確保する。ナムチェでは電気は通じているものの、電話はまれにつながるのみ。昼の余震より思案顔であった友人は、家に帰ると言って去ってしまった。

17時前、外から宿の奥さんに呼ばれる。何事かと聞くと、地震が来る時間だとのこと。しばらくロッジの家族と一緒に待機するも何も起こらず、みな笑いながら屋内にもどる。その後、二人連れの西洋人男性とガイドが食事を取りにロッジを訪れる。二人は早くカトマンズに戻りたいと言い、ガイドは飛行機が予約できないのだと説明している。食後、ガイドの強い要請により二人は部屋には入らず、外に安全な寝場所を探すといってロッジを出て行った。

夕方になると少し電波状況が改善する。ごく遅いながらも持参のデバイス経由でPCをインターネットにつなげることができた。メールを開くと安否確認のメールが多数届いており、大学や家、関係各所に状況報告をおこなう。ニュースサイトは重くてほとんど開けないものの、カトマンズの被害の大きさに衝撃をうける。

夜、ロッジの家族は小学校のテントで寝るとことで、筆者にも「テントを探してやりたいがもう空きがない、地震が起きたら走って逃げろ」と言い残して出てゆく。深夜、余震が起きるたびに外では歓声があがる。

2015年4月27日 曇り時々晴れ

昨日の西洋人二人組とガイドは結局、近くの茶店の長椅子で夜を明かしたらしい。「ここ（ロッジの食堂）の方がまだマシだった」と不満をこぼす。ルクラには寝る場所が確保できるかもわからないから、しばらくナムチェに滞在することにしたとガイド。彼らはスマートフォンでニュースを観ては、ため息をついている。

筆者は新しく雇ったポーターと一緒にポルツェ村へ向かう。途中ですれ違う人

たちは、今日は13時に地震が来るから、それまでに村に着かなくては危ないと忠告してくれる。誰が言っていたのかと聞くと、テレビでそう言っていたのを誰かが聞いたらしいと言い、要領を得ない。

調査地であるポルツェ村には13時すぎに到着。地震が来る時間だということで、村の女性たちはジャガイモ畑の真ん中にビニールシートを敷いて茶を飲みながら雑談している。話を聞くと家は壊れたが、村には死者やけが人は出なかったとのこと。また、エベレストに行っている村の男性たち数十人もみな無事、ただしその多くはハイ・キャンプに取り残され、救助を待っているという。程度の差はあるものの、見渡す限りどの家も壁が壊れている⁴。

下宿先の家では主人夫婦が玄関先で昼寝をしていた。ロッジを兼ねる比較的大きな家で、ここも軒下が少し崩れて壁の漆喰にひびが入っている。地震の日、夫婦は外の物置で寝たと言い、「主人は怖い怖いと言ひながらお酒を飲んでグーグー寝てしまった。私は怖くて眠れなかった」と奥さん。シェルパは恐怖を感じると頭痛とめまいがしてきて吐き気がするのだという。息子二人は不在で、それぞれネパール側とチベット側からエベレスト登山の仕事に行っている。ネパール側から登っていた長男は、今日キャンプ2からベースキャンプまでヘリコプターで降りることができた。チベットにいる次男は、チベット側のベースキャンプで待機中だという。

主人は昼からお酒を飲んでいる。「昨日は被害状況の調査のためにクムジュン(隣村)から警官がきたが、けっきょく政府は我々に何もしてくれないだろう」と言い、「くれるとしてもせいぜい1,000ルピー⁵くらいで、それもサレリ(郡役所のある村)までとりに行かなきゃならない」、「政府は怠惰だ」と愚痴を言う。

奥さんによれば4年ほど前に大きめの地震があり、「そのときは食器がカタカタなって壁が少しあがれた。小さな地震は時々くるけど、こんなに大きな地震は生まれて初めて」とのこと。また80年前にも大きな地震があり、その時は多くの人が亡くなったらしいと教えてくれる。

電気は来ているものの、電話は村はずれまで行かないとながらない。家の傾いた壁には丸太でつっこいがなされ、畑にはところどころテントが立てられている。村の人たちは石垣を積み直したり、損壊の少ない家を修理したりしている。

2015年4月29日 曇りのち晴れ

この日、ネパール側からエベレストに行っていた村人たちが戻ってくる。下宿

先の長男はキャンプ2で地震に遭った。あっちからもこっちからも雪崩が押し寄せてきて恐ろしかったと言い、それでもヘリコプターに乗れたとはしゃいでいる。声を聞いて出てきた父親と無言で握手を交わし、母親は話を聞きながらわずかに涙をこぼす。同じくキャンプ2にいたという別な若者は雪崩に呑まれ、一時間くらい気を失っていたらしい。彼は言う。「怖かったけど、恐怖とは腕をつねられるようなもの。その時だけ強く感じてすぐに引いてゆく」。

下宿先のテレビはこの日になって映るようになった。壊れたカトマンズの映像が繰り返し流され、しばらく観ていた奥さんは「アーモモ(もう十分といった意味の間投詞)」と言って部屋を出てゆく。

この村には人的被害がなく、男性たちが無事にもどってきたこともあって村内は賑やかになる。しかし隣の村はエベレストで死者を出してしまい、もう少し沈鬱な雰囲気のようだと隣村出身の奥さんが教えてくれる。地震発生以来、物置で寝ていた下宿先の一家は、この日から夜も家の中で過ごすようになった。ただし奥の寝室ではなく、入り口に一番近いネパール人ポーター用の大部屋で横になっている。

2015年5月4日 晴れ

筆者はこの日、メール確認のためナムチェへ移動。開発援助の専門家からは首都に戻るよりもしばらくここで様子を見たほうが良いとアドバイスを貰い、ソルクンブに残ることを最終決定する。

このときにはすでに多くのロッジや商店が普段通り営業を再開しており、どこからか80年代のハードロックも流れてくる。カトマンズ近くの村からロッジ経営のためにナムチェまで来ているマガル族の男性は、「スタッフは減らすけどロッジはこのまま次のシーズンまで開けるよ」と語っていた。ある商店で買い物をしていると、主人と客の会話が聞こえてくる。客が「シーズンはもう終わったのか?」と話を向けると、主人は「地震の日に終わったよ」と答えて両者笑う。外国人はいつもより格段に少ないものの、新たに登ってくるトレッキング客の姿も見られ、地域は活気を取り戻しつつあるように見えた。翌日ポルツェに戻る。

2015年5月10日 晴れ

この日はポルツェ村に、今度はナムチェから三人の警察官が来る。村人が案内をして家々を回り、各戸の被害状況をシートに書き込んでゆく。その様子を見な

がら立ち話する村人たち。誰かが政府から一戸当たり10万ルピーくらいもらえるのではないかと言うと、首都から来たバウン⁶である小学校の先生が「そんなに貰えるわけないだろ」と即座に否定する。最初の発言者は「上の人たちがポケットに入れてしまうからなあ」と言い、納得した様子を見せる。一通り村を回ると警官たちは小学校の教室に陣取り、校庭に集まつた村人は一人ずつ中に入つて調書にサインをしてゆく。

最初の地震の時点では、建物は破損したものの若干ながら観光客の往来もあり、ソルクンブでは見通しは楽観的であったように思える。損壊の少ない家の人たちは、ニュースで報道されていたとされる3日から4日の余震警戒期間を過ぎると、生活の場を再び屋内へと戻していった。ナムチェでもロッジや商店の営業が再開されており、このまま普段の生活へと帰つてゆくものと筆者は考えていた。

2.2 二度目の揺れ

2015年5月12日 晴れ

この日、長男は隣村のミーティングに出席するため早朝から不在。午前中、筆者は奥さんと一緒に村の裏手へヤクを追いかけてゆく。二度目の大地震が発生したのは昼過ぎのことであった。

12時55分ごろ、昼食を食べて下宿先の夫婦と玄関先でお茶を飲んでいたところ、再び大きな揺れ。建物がギシギシと音を立て、壁の漆喰がパラパラと剥がれ落ちてゆく。慌てて一段低くなった目の前のジャガイモ畑に飛び降りる。50メートルほど離れたところに見える公民館はすでに傾いていた壁が完全に崩れ、目の前で二階が潰れる。

村の人たちはみな屋外に出てきて、口々に叫んで身内の安否を確認している。村を歩くと、方々で石垣が崩れて道をふさぎ、家の損壊も前回より大きいことが一見してわかる⁷。村人たちはそこここで道端に集まり話し合っている。私が通りかかると「今やこの村は完全に壊れてしまった(サッバイ・バルキヨ)」といい、「日本にもこんな地震が来るのか?」と尋ねられる。老人たちは数珠を繰りながら「オンマニペメフム」の真言を唱えている。

とはいひ二回目ともなると対応も手馴れており、30分ほどするとあちこちの畑には再びテントが立てられていった。テントを所有していない人々は、木材やブルーシートと崩れた石を組み合わせて、畑の中に簡単な居室を作りはじめる。

しかし下宿先の主人は意気消沈して玄関先に座り込み、ほとんど口も利かなくな

なってしまった。筆者は奥さんに、テントを張りたいから心当たりに聞いてきてくれと頼まれ、主人の血縁者の家を訪ね回つてようやく一張りを確保する。

今回は村の水力発電ポンプも壊れてしまい、電気がつかなくなる。ろうそくとヘッドライトを点して食事をとり、夫婦と戻ってきた息子はテントへ。お前も外で寝ろというのを丁重に断り、筆者は自室へ向かう。夜は数度、小さな余震で目を覚ます。

2015年5月13日 晴れ

村内では朝から槌音が聞こえる。13時半から14時のあいだに地震が来るからその間は家に入るなどい置き、奥さんと長男はそれぞれ他家の片付けを手伝いにゆく。主人は畑の中にマットを敷いて昼寝をしている。すると村の酒飲みが二人やってきて、アラック(焼酎)を飲み始める。三人で飲み続け、「地震が来ても楽しい」などとひとしきり盛り上がつたのち、彼らはそのまま夕方まで寝てしまった。

その夜、連絡のためナムチェに行きたないと相談すると、今は道が悪いから少し待つ方が良いと奥さん。誰が直すのかと聞くと「さあ」と言う。ともあれアドバイスに従うことにして、このあと数日のあいだ村で様子を見る。

2015年5月16日 晴れ

この日になって筆者はナムチェへ向かう。確かに新しい土砂崩れのあとが残っているものの、すでに踏み固められていて通行可能になっている。道中は全く人の姿を見かけず、ナム

チでは商店もロッジもほぼ閉まっている。次のシーズンまで開けておくと言っていたマガルの友人もおらず、顔見知りに聞くと2回目の地震でみんな自分の村に帰つたとのこと。最初と同様、地元住民向けのロッジに泊まる。ボル



写真5 大規模な土砂崩れのあと。これは後日撮影したもの(2015年6月12日撮影)。

ツエの村人も何人か買い出しや連絡のためナムチェに滞在しており、登山で知り合った外国人から届いたメールを読むよう頼まれる。内容はいずれも安否の確認とお金が必要なら送ろうといったもの、ネパール語で口述されたものを英語に直して返信する。「ナムチェにはいろいろな人がいるから、下手な人に頼むとお金をくれるというところだけわざと教えてくれなかつたりする」とのこと、利害関係のない外国人である筆者は適任なのだという。

二日後ポルツエに戻ると、村近くの森の中で若者10人ほどが木を切り倒していた。国立公園に許可を貰ったので、倒壊した家の柱にするとのこと。

2015年5月19日 晴れ

14時15分、数人の村人が公民館の前から大声で村中に呼びかける。この日、ヒマラヤン・トラスト⁸から救援物資としてタープ（防水の大布）とインスタントラーメンが届いたという。このとき村人たちは、各戸60ルピーずつポーターの運送料として支払い、必要な家だけがタープを受け取る。ラーメンは独居老人らに対して10個くらいずつ配ってゆく。このとき村人には、初めて会う若い人たちが多いことに気づく。地震で学校が休みになったので、みなカトマンズから一時的に帰省してきたのだという。またこの日には、チベットからエベレスト遠征に向かっていた次男も帰ってくる。地震が起きたため、代わりにラサを観光して戻ってきたとのこと。

2015年5月23日 晴れ

9時45分、数人の若者が公民館の前に机を並べ、再び大声で集まれと声をかける。今度は冬季にこの村で登山学校を開催しているアメリカのNGOが義援金を持ってきたとのことで、アメリカ人メンバー二人も村に来ている。集まった村人は一戸当たり5,000ルピーずつ受け取り、名簿に押す。村人はお返しにカタ（感謝の白布）を二人にかけるので、彼らは雪だるまのように膨れ上がってゆく。村人たちはそのまま公民館横の斜面に集まって座り込む。一通りお金の受け渡しが終わると、今度は村の若者が名簿をもとに老人たちの名前を呼び、一人ずつアメリカ人から米国の登山用品メーカー、パタゴニア（Patagonia）の衣料品を受け取る。渡すたびに拍手が起き、数人はその場で羽織らせもらったりしている。合計44名に衣服が贈られたのち、お寺や公民館にも数万ルピーずつ寄付された旨が若者によって告げられ、再び拍手が起こる。さらにこの日には、隣村からアメリカに

移住したというシェルパ族の夫婦もやってきて、老人や単身女性に5,000ルピーずつ渡していた。

このあと村の若者たちは水力発電ポンプの修理に向かう。土砂崩れで折れた導水パイプを隣村のオフィスから届いたスペアと交換し、電気はこの日ようやく復旧した。

2015年5月25日 晴れのち雨

この日、筆者は所用のため再びナムチェに滞在。商店は数軒が営業を再開しているものの、ロッジは依然としてほとんど閉まつたまま、観光客は一名見かけたのみであった。

この日も同じロッジに部屋を確保して村の人のメール送信などを手伝い、夕食後は自室で横になっていた。

21時半ごろ、窓の外ではざわざわと話し声が聞こえ、懐中電灯をつけた人たちが次々に通り過ぎてゆく。何事かと思いながら横になっているとロッジの娘が呼びにきて、「来る（アウンチャ）から逃げなくてはならない」という。何が来るのかと尋



写真6 NGOメンバー（中央）と記念撮影する村人。左手奥には壊れた公民館が見える（2015年5月23日撮影）。



写真7 閉鎖としたナムチェの商店街（2015年5月25日撮影）。

ねるもわからないと言い、それならここに残ると主張すると、ロッジの主人と奥さんも現れて「ナムチェからは全員が避難する、靴を履け」と強い口調で言うので、仕方なくヘッドランプをつけて外へ出る。

主人夫婦と娘二人、ロッジの一角を間借りして小商店を構える若者、それに筆者を加えた一行6人で、村の裏手の山を登ってゆく。主人も何が来るのかはよくわからないが、とにかく高いところへ逃げなければならぬのだと主張する。主人の本宅がある隣村まで行くと言って、早足で夜道を登ってゆく。一方、一緒に逃げることになった商店主の若者はいさか冷笑的で、「いったい何が来るのやら」と呟き、疲れて座り込んだ主人の荷物を代わりに担ぐと「重い、石でも持ってきたんじゃないのか」とおどける。後ろからも次々とナムチェの住民たちが登ってきて、振り向くと眼下には蛇行する光の列が見える。人によっては毛布を括ったものを背負っている。ナムチェにしか家がない人々は、今夜は丘の上にある滑走路で寝るのだという。

この夜、けっきょく我々は隣村まで2時間ほど夜道を歩きとおすことになった。主人の家は壊れているため入れず、居室に改装してあった畑のビニールハウスにマットレスを敷いて雑魚寝をする。

翌日ナムチェへ戻ってから聞き取った情報を総合すると、上游の氷河湖にひび割れが見つかったため、ナムチェの横を流れる川が決壊するとのうわさが流れ、パニックが発生したようであった⁹。なお滑走路で寝ていた人々は、追ってきた警官に説得され、夜のうちに村へ引き上げたという。

これ以降、筆者の経験した限りでは大きな余震や騒動などではなく、生活は少しずつ落ち着きを取り戻してきた。しかしソルクンブでは、二回目の地震による家の被害は初回よりも大きく、筆者が地域を離れる2015年7月4日になっても、多くの村人々は依然として屋外に住み続けていた。また2015年6月27日、ポルツェ村のドゥムジ（村最大のお祭り）の最終日には、祭礼中に誰かが「地震だ」と叫んで多くの人が寺から駆け出すなど、地震は依然として日常生活の中に留まっている。

おわりに

本稿では2015年ネパール大地震発生当時のソルクンブ郡における状況を、筆者のフィールドノートに基づいて報告してきた。

筆者の調査地であるポルツェ村には、トレッキングや登山の仕事を通じて知り合った海外の友人などから様々な形で支援や物資が届き、その点では被災地でも最も恵まれた村の一つと言えるであろう。筆者が確認できた限りでは、村全体に対する支援は滞在中に三度おこなわれ、6月末には新たに国際登山会社からの義援金も決定して分配の準備を進めていた。そのほか個人間の支援の申し出は数えきれず、地震後もなく実際に村を訪れてきた外国人もいる。他方、2か月が経過しても村には国からの援助は届かぬままであり、政府への不信感は募る一方であった。

「未来共生」を「AとBとが出会い、相互関係が進展していく過程のなかで、Aも変わる、Bも変わる、そして新たな価値 α が生じる」（志水 2014: 45）ものと捉えるならば、ネパールのエベレスト地域は、登山／トレッキング観光のフローのなかで、住民であるシェルパの人々や、雇用機会を求めて集まるネパールの多様な社会集団の人々、そして世界各地の観光客からなる、際限なく連鎖する相互関係の場である¹⁰。それぞれの滞在は短期的ながら絶えず訪問者を迎えてきたこの地は、様々な言語や文化的背景を持った人々の間で常に新しいネットワークが形成され、相互の価値観が変容し、物理的にも社会的にも新たな α が生み出され続ける、ある意味では究極的な共生の実験場とも言える。災害時においてはこうしたつながりがライフラインとなった反面、地震はその場の脆弱性もまた住民たちに意識させるようになった。とりわけ二回目の地震以降は「観光客がこなくなったらどうすればいいんだ」など、先行きを不安視する声も聞かれるようになっている。

本稿は震災当時の息遣いを伝えることを第一義とするものであり、詳細な分析や他地域との比較についてはいずれ別稿にておこなうものとしたい。ただし、これまで少ながらぬ日々をソルクンブ郡でシェルパの人々と共に過ごした経験に基づくならば、当地の文脈に限定したうえで一つだけ述べておきたいことは、「地震があったのにトレッキングにいくのは不謹慎」（ある日本人男性の語り）と考えるよりも、むしろ彼らの村を訪れて規定の分だけお金を落としてゆくことこそが最大の支援であると認識すべきということだ。人々は一日も早く日常に復することを望んでおり、その日常とは観光客や他民族の人々との「共生」の風景なのである。

謝辞

本報告は日本学術振興会特別研究員奨励費262306の助成を受けて遂行した調査の一部に基づく。現地滞在中の筆者を案じ、さまざまに助言をくださったみなさま、とりわけ「外は危ないからここにいろ」と言って頂いたポルツェ村のみなさま

に心より感謝申し上げます。また亡くなられた方々のご冥福と、一日も早いネパールの復興をお祈りいたします。

註

- 1 2015年11月現在。Government of Nepal, Nepal Disaster Risk Reduction Portal (<http://drportal.gov.np/> 2015/11/14 アクセス)
- 2 同上。
- 3 予告よりちょうど1時間遅れで発生したこの揺れにより、予定時刻から1時間は警戒せねばならないという言説が広まった様子であり、のちに何度かこの余震に言及する語りが聞かれた。
- 4 なお筆者の確認(2015年4月30日)によれば、民家13軒がこの時点で居住不可能な損壊を被っていた。
- 5 調査時点では1ルピー≒1.2円。
- 6 ネパールにおける最上位カースト。
- 7 ナムチエ警察署の集計によれば、最終的なこの村の被害は全壊60戸・半壊45戸となっている(2015年6月27日確認)。ただしこれは調査時の村の戸数90戸とは一致していない。なおソルクンブ郡全体では、死者22名・負傷者100名、全壊9,172戸・半壊11,137戸となっている。(前出 <http://drportal.gov.np/> 2015/11/14 アクセス)
- 8 エベレスト初登頂者エドモンド・ヒラリーによって設立された国際NGO。「ネパールのエベレスト地域におけるコミュニティのエンパワーメントと貧困の削減のために活動」している。[\(http://himalayantrust.org/](http://himalayantrust.org/) 2015/11/15 アクセス)
- 9 ただし川はナムチエの中心部からは数百メートル離れている。
- 10 ただしここでは、誰がマジョリティであり誰がマイノリティであるかは必ずしも固定的ではない。

参照文献

志水宏吉

2014 「未来共生学の構築に向けて」『未来共生学』1: 27-50。